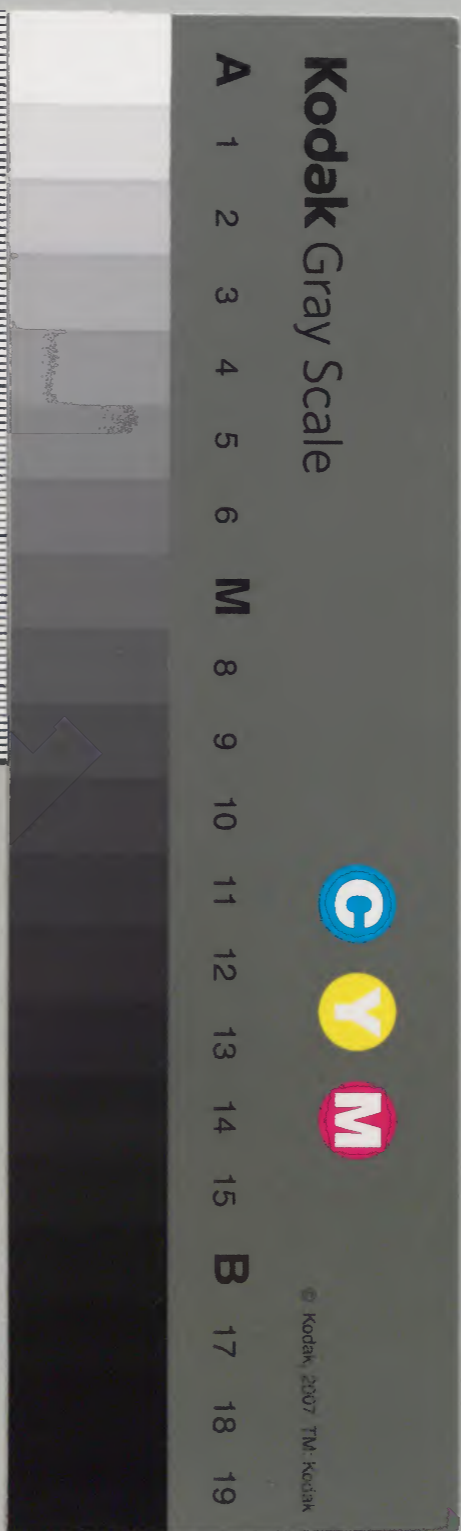


益
瓦

庫文官政太			
		一	和
		二	書
		三	門
		四	
		五	
		六	
六	二	一	
五	架	函	號

庫文閣內			
		一	和
		二	書
		三	類
		四	
		五	
		六	
二	一	一	
函	架	冊	號

內閣文庫	
番號	和 11497
冊數	65 (24)
函號	211 302



教
文庫印

高
僧
書
印

南
政
書
印

武城東下総列境深川本誓寺

江戸四ヶ寺に隨一箇
浄土鎮流し

二十四^内 一二七九〇號

冬^{二箇}廿^十災あり又中^二や^一た^一り^一る^一日^一は^一と^一そ^一の

そ^一の^一地^一も^一り^一なり^一り^一る^一院^一主^一上^一人^一す^一る^一

ま^一の^一と^一み^一月^一の^一す^一く^一前^一大^一僧^一正^一御^一坊^一祐^一一^一ま^一い^一り

齡^一は^一ま^一な^一り^一か^一り^一ふ^一れ^一は^一色^一ハ^一介^一ハ^一い^一り^一あ^一と

寺^一堂^一再^一建^一ト^一か^一な^一ひ^一り^一覺^一一^一侍^一る^一に^一退

院^一ト^一カ^一あ^一り^一後^一住^一成^一了^一と^一芳^一ト^一侍^一り^一ん

と^一ふ^一り^一に^一御^一坊^一云^一々^一り^一と^一そ^一か^一押^一の^一い^一と

くたぎひそ志の路づに幸もしてたれせなん
予そのうに講中小交り立て開点せし石像
の地藏もや海もまた大士に誓ひ空しくか
おどたしおやまもさうさやなんどいしく
秘んあにのいすいし御坊ハ今年孟蘭
盆會れ夕づめてたに場は現すと西遠あり
しりハ人こいお海に信心もたけ免ら
たすあし其うふりなにとなく本誓寺

乃地藏不可らしといち一函に靈驗あり
と四街に傳へるや、参り初侍りし夫よ
平日に人多くありて八月の中比ふは教万
孔男女道とこりあつて貴とれく賤となく
あつて地へ侍りしや、小菊月小なりて
大なる其あつりたを海もさうさや
や、小群聚し侍りし或ハ其地を水で取て
病者小あつし海もさうさや心もたけなり又

皆持まりて返^テ悔^ケして却て信^ニ奉^ルとの
日々小多りりしはこれハ檀越此人々集て
散物^ハ以て^テ皆寺中に納め^ルほどに神
毎月た^ラハ数千金積^リめり此れ^ハ以て
寺い^ハれ^ル伽藍も建立に^クい^ハる^ル中^ニふ
さ^ハなり是前大僧正の加^カ被^ビ力^リなりと^ハん
い^ハり^ハる事都鄙^ニ終^ルふ多く大^ニし^テ誰
惑^カ者^ニの世^ニ証^シは^シり^テし^テ類^シひ又ハ利^ノ爲^ニなり

僧家より云^ハる^ルや^ラく^テ欲^ス海^ニ漁^ル事^ト少
く^シて^ハ侍^ルる^ル所^ニ類^シひ^テ自然^ト人^ト此
信^ニ奉^ル終^ルは^シり^テ初^メて^ハか^ク繁^昌侍^ルると
一^ニ奇^ニ事^レれる^ル歟
勢^別衆^名石^之れ^ノ石^地藏^我尾^城下^清淨^寺
此^地藏^乃古^蹟跡^墓之^立ま^あせ^り山^北原
の^石像^等と^曰ふ^類れ^やふ^覺へ^侍れ^り

其^外法^師又
く^も多^クし

夫地藏尊ハ具足善忍レ大士最極慈悲ノ薩
埵にていぢり侍ル故小和漢古今利生
孔靈異書小記一口碑に侍ルをりり
いとゆぢり凡そ悪逆毎道小く出離の縁
ぢよ輩とかい家奇特見聞して我らぢ
参りて御名と唱へ合掌してわらざる好因
縁に結ひ侍るかればあふり六趣の
沈淪をまぬくれ侍るたよりとあふ下や

侍るにわいとあふり侍るに侍る
一りハ彼院一人ぢりまを船包な
奉りてふりの靈水取持来りりバ不思
儀の結縁に思ひあ

ふりりぢりあふり侍るに侍るに侍る
うて院主本意に如く退隱一二十両に佛
殿再興の料と一五百金に地蔵堂建立
のたあふり其他數百金をハ當寺に佛聖料

杜姓大僧云祐天子うめて自く記さの所
あしくりるやこ或上人にせるも伝り一
あし書写し傳はす

落花生ハ藤蔓莖葉豆に似る其花落地
一果土中に結其味甘美常に異なり人珍貴
と云東垣が食物本草三に見也山菜同類
ひらひらあもバそとり毒れく補虚のと
のみく傳るし是一傳るあれ豆の類也

地錦抄に其うくやうかくりを記せり
こもゆてもこけいららうしりを

多く又我國に一種も存在しる實は也
筋枝龍眼とり閩中小生トて二種一類を
如くれきども其能同トく次次荔枝を多く食す
ハ虚熱は登と龍眼ハ此事也

西凡ハ東垣礼れ削瓜の文小よりて古より
中國有ありる也然れども中世契丹より傳

一とをその実得たるり食物本草に一
種揚漢ヤウケンと云物あり秋生ト冬熟す形互に
長匾ふして大なり色エニ臙紅味酉ウに勝也
冬より次年ト夏までもありてエ壞エやんト云
是乳を杖國ふハなる乳ふや
南乳ホウとをウイ回統ウイ乳水ウイといトぬふ又トは
ちやと云あや
鴛鴦ウシハ雌雄メオス暫時シバシバも不捨シ其一ヒトハ失シれハ思

慕ホ惟ウ懼クして死シ古コ人ニあレバハ匹ヒ鳥トりハ此コ鳥
性セウ強キヤウれキをシ鶉チウ鴿カのノ食シをシふハ似ニとシ負ツり
しテ外ノにシ交ワらズとシ正シ一ヒト鶉チウ鳥トハハ諸シヨ鳥ニ交
るル魚イサふハ吳ウ中ニハハ昌チヤウ侯コウ魚イサ諸シヨ魚ニ交ワらズとシ交
るル者モノふハ邪ジャ也ナリ人ニふハ夜ヤ發ハツのノ夕セキ一ヒトに出デ
てシ乃ハれトなルふハ胃イにシ交ワとシ耻ハべシふハ事コトあリバハ忌ミ
憚ハ氣キなク侍シるル東トウ都ト此コあリとシ我ガいハふハ申マシ此コ
かリらズとシいハれキとシありクとシぬイとシあリはシ

終身一夫小して他代知らざる者實少く
歩狹

天工開物三卷陸異邦此雜記也凡十八條
ほらし記事も同くあり其中ハ木綿の事
申扱してあり多し其圖ハ畧し傳るのみ

布衣 趁 彈 紡 具圖

凡綿禦寒棉花古書名京麻種遍天下
有白紫二色春種秋花花先綻者逐日摘取

取不一時其花粘子下曝登趁車而分之去
子取花懸弓彈後以木板擦成長條以登紡
車引緒斜成紗縷然後繞筒穿經熟織凡
紡工能者一手握二管紡于錠上凡棉布寸
土皆有而織造尚松江漿深尚蓋湖云外
國朝鮮造法相同惟西洋得其機織天州凡
織布有雲花斜文象眼倣花等云云

按古今小棉布此造法織製之也天生

なる宗田蓮社にして自知識チシキ以唱ナリへ鑄鐘の
勸縁キエン以ニやリ成ニ七月日ありニ以テ其資シ縁ニ
足リ下ニ同ノト九月寺小帰リ々々徑ヲ二尺九寸を梵
鐘ヲ以テ鑄リし宗田の住寛クワン答カ和上ニ曾我小行
テ助縁ヲやリ故障ヲ以テ供養ありて帰リ余
に語リく曾我ヲ梅沢ノと酒ノ勾ノとの同ノ回府ノの
北ノ敷十町北山里あり是祐信ノ以來ノ代々ノの城
地也其城門ノの墟ノの前ノ小寺あり故号ト以テ

祐信北古墳山上小在リ了祐成時致シ此祠ト之昔
覺レへく行ル城前寺小其牌ヲ以テ立テく此法名ヲ
板ニ以テ彫リて人小施スくニてテ与ハられル也
右小粘リ其レけ寺ヲ云フ四境曾我庄五村と呼ブ處民
項日集リ了議シて田ヲ以テ捨テ常不退轉ノの念佛
所ト以テ次寺境小地藏堂ありシれテ登ル小ハ南
海ニくニ望ミ幽嶋霧ニに出没遠帆雲ヲ以テ
々々行西ハ箱根の山ニく紅葉ヲ以テ酒ノ勾ノ

萩賦水

新ひる水のあやまで唐あのを綿とよめる秋萩のむ
もハ 但馬守友著主け合子よをたほひりよとぞいよと志
の御年いよとあがせよよとぞとてく数れ一あんと天
性の秀刀よとてよとぞ

京都の菊花数百種見侍りて一京のこれ殊り多
く是く侍る大いん大りし七八寸の多し都
かいに去年く花の大きやくれるも侍る中り
今年此菊合小徑一尺二寸ありは廿一とや

く和 外ひとく内白丁子
碱法界と名付け

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

林下短吟更に苦ク〜壯士シ壯シ漸シく消ス〜
隣ト毛モ秃ツ筆ヒ以テ潔ク

孤村車馬ニシカリ少ク去テ水天長雲外四望雪林頭
一樣黃松高寒ニ古巷菊老テ傲新霜凝眼ニ真無シ

味空ニ者ハ三徑ノ荒シ

風ニ多ク〜アオカハラ海ノ荒シ尔ノあら〜マ海ノ荒シ尔ノあら〜マ

あ川ノあ川ノ 今ハ山石川ト 呼ビ侍リ也 トいふ流レは〜り〜り〜が

あら〜マ 〜り〜り〜 〜り〜り〜 〜り〜り〜 〜り〜り〜

捨テ唐詩ハ崇ニ道義トと外ニ小シ〜テ文章ハ事
ととら者實に胡氏ノ罪人ノ〜〜次ニ聖

人ハ罪人ナリあら〜〜 領ト

許台仲ハ無シ德ト富貴ト謂フ之ヲ不詳

嗚呼後世徳義ハ小シ依ラ〜〜名ハ節ハ思フ〜〜清

素ヲを賤シ〜〜華ヲ修ムと好ム比屋大〜〜知ル

〜〜あら〜〜

ん〜緑ハ食テ君ニ事ス者ハ忠義ヲ〜〜や

をあれどづよふ終は忠ふニあり道は以て君
に覆ひてあらば化せしを大忠也徳を以て
君に調てこれと輔るハ次忠也是は以て非
に諫てはを怨るハ下忠也
周公ハ大忠管仲ハ次忠
子魯ハ下忠也韓詩外
傳り礼記小人臣ハ其身は殺して君に益あ
るハ則ち終は篇しと云つ中務卿宗良親王
此歌に

君の爲世の爲何うやんぞとて命けりせば

今冬玄猪は御賀 文廟は法會中なり
り下の言は用ひしをたまたみ廿四日の文
柳管は 了かいあを御家人に召しぬれ
るにげや 終ひし
東城を年火災多く跡ふひらびりて滑りぐ
身も火消の役人にて終て祈のまのいろひも
ゆへとくんとする以上は家くより其曲至

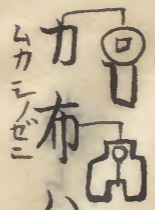
二丁の留火あつたその館の主人つら
そやくいづくお消えつてに旨令あり市井も
其人決定めらるるとうや

このあつた十月廿日の夜有司急ふ令してその変化
告らる 火消爰 天竺法船 中川坂元 奉命

三幣 管子

以珠玉为上幣以黄金为中幣以刀布タウブ為下

幣ヒ



カブハ 銭之我國古昔玉タマ至宝とせし中世以

來る黄金白銀錢貨カネの用ひて珠玉タマ此宝
多に变化ありし且幣ヒと云はば白紙シラカミより
く串木クシキの物との事いはるや
群書備考四法曰茶之名始見王褒カ僮約盛於
陸羽カ茶經而其稅則自唐始也シ云
今ありの煎茶のシにして我宇治カ此名
産れ如カハ明僧カ十呆カい一アカ一布
ふと我國此茶カ上品とすべし唐茶カ年々

さしぬきいしつし 雅かぬ事ハ雅也我ガ

ひん茶にハ不及

居家必備 五葉枕ヤチの方あり 頭凡目眩ケ治イと

としつ

蔓荆子ハ分 甘菊花ハ分 細辛六分 吳白芷六分 芎藭六分

白木五分 通草九分 防風八分 藁本六分 羚羊角八分

犀角八分 黑豆五合棟 石上菖蒲八分

右件の業細到一碎末とあり 生絹スの囊フクロ

に盛て枕に加ふ 三五月の後 某気歇れ

はくれは換カといふ

同書れ 根生要録に 彭祖曰 人不能無思 當漸

漸除之云 但能不思 衣食不思 声色不思 勝

負ヲ不思 得失不思 深辱云云

嗚呼 世人常に病なく 延年れらん 所中

欲や 俗者なく 其措生 此道は 志ら

次いづら 小衣服の奢オチはり 且ち 飲食の

身は嗜々色小近づけ溺き自勝他方の
ともし小沈々得は喜び失は愁名利の街
小馳せ栄は謀で辱はあつて心止時な
く毎に思ひは骨とて身小病かゝらん
欲も寒は厭て衣は脱は暑は苦て
毫を衣るが如く出れば愚と謂さるべらん
和ら喜樂を陽は墜し念怒ハ陰を破り
悲哀ハ竟を傷し憂愁ハ臟は痛かゝる驚
カハナモ
ヨコナ
モノヨモヒ
ヤブ

恐ハ心ゆして倚りあらなり
ハ性は損し疑惑を令は害し談笑ハ神を
と失は或は起君節を以て行立坐卧久し
此類は事にあれ度なく侍るく小凡
寒暑湿は浸し雨小くは霧小やふらま
夜不寝昼即し又ハ旅行小くくあ
ちの不養生は病に疾あれハ
事此小ハくにあはるはとく医は集め巫は

たの良自うかゝる人哉愁へしむれ哉
うゝあゝやうぶふいつうり茶餌哉
以てとらしむも馬小のりく少け盗ヌセト
と牛小のりく追ふく如くいうでゆれ也
とくつみや嗚呼是一旦の身シ養ふとら
猶ゆらとくく其心シ養ふとくいうでく
知るゆれされハ夢幻れあゝるれ身ハぬ
とく保養其法のおくにはとくもたきう十

歳れくくばうくぶよ長生のふめりな業
さくも亦タ次キに愚ヨありたが長シ世セ此ヤ圖キ哉
出て三界の外小道遠く待らん道くく河
らまほくくれ此故小我佛慈シ垂タれ教シ哉
施して迷徒シ導シにシ給ヒぬシれシ学ビて
三途の穢惡を離き九品此淨土に入法し
嗚呼

同書守庚申法古枕高瀬 此按ぶるに三神シ也

太上老君テイクワン泥丸真人ニイワン 頭中 太上帝絳宮真人ヘイウ

太上黄老君黄真人ヘイノ 胸内

此れ之尸成依シ々々々々々々又創三尸於日
也甲寅庚申又春ハ乙卯日夏ハ丙午日秋庚
申日冬ハ壬子日三尸成除シ術成之シ然
らば庚申於日シ之加ふらシる也其シ咒
其符往々見シ一乃祭是異邦妖道士が業小一
く我國人シ此成傳シ一親氏利の爲小一此成

修一青面金剛夜又成以てシ此成庚申シ云
雪上に霜成シ々々成と世成惑シ一人成誣シひて
三尸此虫を除七魄成鍊シ百病成治一富貴
得子孫成昌シ一むシ欲成嗚呼シそれ慮シの無シ也
和漢久一シ成歎
胡安定云患シ隋唐以來仕進尚シ文辞而遺シ經業
苟趨シ禄利シ
凡シ之學ハ知成シ榮シ貴シ倫シを明シらシるシ一廉シ恕

忠勤固に報_レ民_レ安_レる_レ所以_レ也_レすや
然る小文華_レ先_レ詩章に倣_レ是_レ以_レ
く学文_レと_レれ_レ隋唐_レ以来_レ代_レ
々_レ階然_レ宋儒_レの_レ患_レる_レ深_レ程朱
此_レ如_レの_レあり_レ我國_レ文字_レ学_レ久_レ近_レ世
儒士の_レ学_レ程朱_レの_レ書_レ以_レて_レ講_レと_レ又_レ一_レ種_レ陸
陽_レの_レ学_レと_レ術_レの_レ或_レの_レ文章_レ以_レて_レ世_レに_レ鳴_レる
者_レあり_レ宋_レ儒_レの_レ以_レて_レ却_レて_レ卑_レ俗_レと_レし_レ西_レ子_レの_レ

一

嗚呼_{キョウボク}仇_{キョウ}牧_{ボク}ハ_レ同_ニ公_ノの_レ乱_レ小_レ首_レ以_レ碎_レれ_レ安_レ金_レ藏_レを_レ
心_レ以_レ割_レて_レ信_レ以_レあ_レり_レ山_レ岳_レの_レ志_レ鉄_レ石_レの_レ心_レ
一_レ死_レ鴻_レ毛_レ断_レて_レ不_レ移_レは_レの_レの_レ如_レ此_レ忠_レ小_レ何_レら
と_レ也_レ夫_レ叛_レ國_レの_レ忠_レなり_レり_レて_レ大_レ禄_レ以_レ食_レハ_レ盗_レり_レ
等_レの_レ季_レ世_レ大_レの_レ忠_レと_レ云_レ事_レ以_レ忘_レる_レを_レ待_レる_レも_レり
和_レ仕_レ官_レ此_レ者_レ也_レと_レく_レ小_レ利_レ以_レ先_レと_レして_レ義_レ以_レと_レ
す_レと_レ類_レの_レを_レ待_レる_レ故_レ小_レ把_レ関_レの_レ事_レを_レ思_レハ
と_レ運_レ甕_レ乃_レ学_レあり_レと_レ何_レく_レも_レで_レ食_レひ_レ何_レき_レと_レら

可衣てくしりあをるあくと止と君り侍ふ
於人よりあを碌々たるん庸とりふ
かを

佛書小四種此慢心三三といふ一に上慢と云
自勝池三三方の慢也二小等慢とハ徳あ於人
と見聞すてと我と亦彼に等一彼何勝たる
更ハあらん三三と慢とる也三小卑下慢我身を
高慢れ人見えても不是此思三三ハ

乃ハ汝云々四小無慢世人多矣區々此慢心何
らむ我小於て何の慢心と云ふと思ふと示
慢心有り嗚呼三三ら此過ハ此四ハ不出三三
きバ心ハやハ人見えてを様三三どあるらん
と思ひあはるく三三だもあはれバ上慢
を三三なるべし知を行もあらん人バ教三三を
受て貴敬とる等慢の心と云ふ如來平等
此心と心と云は卑下慢三三ふく教べし只我身

とて来る可の^ハ皆我より招く^ミ嗚呼又吉
人ふして吉ふ致あり吉人れ心な^ルぬ凶^リ
何^レあるあり凶人ふしてた^ハほく吉事あるあ
里凶人凶凶に終る^ハあり是^ハ我儒ふハ命ふ^ル婦
一^ハ疑ふ、因果と知る^ハふと^ハひ吉人此凶ふ^ハ河
一^ハ疑^ハ我見る^ハ疑ふ事な^ルれ凶人乃吉^ハ我
得^ハて^ハ怪事^ハふ^ハのれ只我吉ふ居ら^ハバ外より
来る吉凶ふ心を動り^ハ事な^ルらん^ハの^ハ

戊戌六月関東の令に鶴^{フル}鵠^{シキウカリ}雁^{カキ}れ類今より三
年^ハれ内諸家^ハあ^ハれ^ハ我^ハ献^ハ上^ハする事^ハふ^ハれ^ハ尋^{ヨリ}常^ツ
饗^{アルミヤク}の饌^ハふ用^ハる^ハ変^ハふ^ハれ^ハこ^ハ又^ハ鳥^ハ我^ハ市^ハする^ハ店
十所^ハと^ハ定^ハた^ハふ^ハ外^ハら^ハれ^ハ我^ハ食^ハり^ハ有^ハ司
印章^ハ我^ハ受^ハて^ハ求^ハむ^ハ一^ハ一^ハと^ハ以^ハて^ハ殺^ハ生^ハ我^ハ禁
一^ハた^ハふ^ハふ^ハに^ハあ^ハく^ハ御^ハ鷹^ハ持^ハの^ハ地^ハ鳥^ハふ^ハれ^ハな
る^ハハ^ハ處^ハより^ハ一^ハと^ハあ^ハれ^ハ我^ハと^ハる^ハ故^ハ々^ハ此^ハより^ハ
くり^ハ令^ハふ^ハて^ハ皆^ハ中^ハ一^ハ海^ハふ^ハと^ハ云^ハ且^ハ其^ハ無^ハ用

此費以ふさげらしめたり御心ふや志や
かうい

御鷹の餌とほりて故て護持院の墟コナトにて
大ととく其口以縛り日以経て彼舌を切
りとり鷹に飼と人たしるべし 常廟の

御時ハ大越つとありありとありしころが
今日ハ又りしありてふ多うたふや定め
るに淳世にありし後の今以てん事をす

今君いふしつ以聞ふとくくむよや

武城北忍の岡の西に根津ツ社と呼あり

文廟に御時故ありしと神殿いありしと
らやありしと供僧コウソウ祠官シカニありしとや

侍るハ山王ありしとありしと俗の説
にハ 文廟ありしと甲府君ありしとを給

て御時其御家人根津某とありしと者あり
忠義此事に死せし其靈以祭らやありしと

とさういふれども又いふとこれ所小あり
まばやんりうりてその妻戸口こほちて
おこにうげと塚ついでをふりうりて
く其家と阿やれく其塚のく残ア一伐塚上
小神や一ありてぬすくあはると記せり
あま今の繁昌此祠とやかくは類猶多の
る中世齊の神とて夫婦のまうりた
る神像伐過小祀とせやらのる社あり

今世三月三日此むな祭とあれこ三瓶神と
田稻此霊とて御食津此神と称する伐かな
か下に三瓶と書やうりて瓶なりと心得と
あれ伐稻荷と呼侍るを多し凡そ式内此神
社ハ一郷小本貫と基や一人の祖其氏
神此社或ハ社稷伐祭ア蚕桑と崇るこあり
尾張四百二十一社ハ海部郡漆部神社
敷一初むしれ漆部氏乃祖神尾張氏の
分流也

氏社也同郡諸桑社ハ蚕桑其具に
社稷小配りるか如し

皆々のくく回宰する人勅命奉じて幣
分ち祭るは侍る故小大社小社の分
名神天由地祇此別ありて社製封境官符に
く代々神階進て祭奉りたまひ其
式外此社のごとく亦國司の請小とて正
しき神との社建さや路ひ後世祀

くバく起りてあぬ悪灵禽獸此類は祭
り和め祠建遂小又式内式外の神号を
呼る其力をとれ侍る神祠多う其昔
邪法の心祇尼祭り社もあり相列の大
山上加計妙香山れごうよ大く山祇祭
り今ハ天物なりと心得侍る
近世神道者としてよく虚誕の説附會
く人成歎者専ら非礼に祈禱なして

正道の教、小江くふハト都ウラバカ兼俱カキトモに初也吉川
惟足イシはし我弘め侍る山寄政義と亦一流を
立て今其教小隨シガふ人多く儒よりしてられ
一流と異端と云へよりと

親氏チ神祇に於ける權實邪正我分ち其
本地法身我以て供養するハいと深き侍
習あり今此神道者の志る所ふあはる

或人同吉川惟足ハいつのなる人ぞ曰東都此

産魚店キョテン此高之ウチヤ
日本橋一丁目に住す
尼崎屋をたてしゆり松平但馬守一良

主に魚の直千金ありといはとも償ツクられホ

るゆへ行頭トヒヤ小家我とらせりはる人此

軒トりり、川市住ヤうかくてをあるは京

都へ上り萩原家の下部シモとありとくくして

吉田家へ仕へ兼頼卒此後彼家此書我

盗せりいと偽我得て自の家にして神道と

くあはるくくく鳴くハ人ぞ其説我聞く

この多し吉田の人々其傳ありて私小説
を成やれどそのめしきしつゝ巴京に去り江
戸にうつりしりし神道を説久しき系に何
んしりし歌の事あるとまじりて覺へり利口人
聞て驚くは志ある小旧事大成此偽書造為
れ夏に縁坐して鎌倉へ追ひいさるるか
きとと潮信軒泰翁稻葉正則少將正俊堀田筑前守等始
より彼れが説面白き夏にして再び京都

ふかへり終に管中小出入せし終らるるまよ
り門人廣く一家をたておのふまに自説
成やれ又問敬義翁はいのぬる人を曰く土
列の人村医の始ハ禪僧 薺藏司 なる山内家
の家老に主計とりしものに唱はれり還
りて山寄加石衛門と称す程朱の学能明
らめり一世の儒士とれり龍中輝正之主
角はへり世小あられり其述作此書多し一晩

年ト部家の神道と説て自灵詞浅京師上御
灵此心スレに建垂スレ加灵社トと額ト是より垂加翁
ト云学文の弟子其神道の説非ト与
さる者々
此傳五一鈴此秘及び五の字符章をト拙く
侍るはや

京浅見安正佐藤
直方等の

実と彼土金

楓ハ郭璞クワクワ去く白楊ハユヤナキに似て葉同ニありて岐河
ア脂ヤシあり香カニと云又字書に樹高く大

一葉三角なり

等云つア我國古書にハウ修らと和訓す

世以來かりでの紅葉

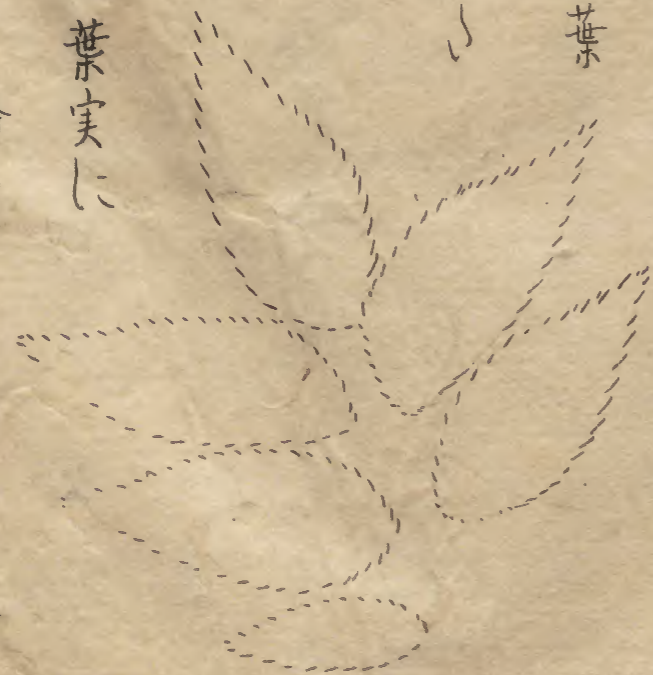
小此字ニ用るハ似

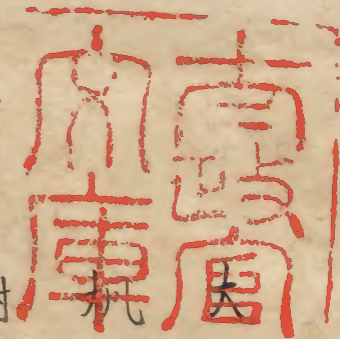
る浅假ニにや

予東都小て楓樹を

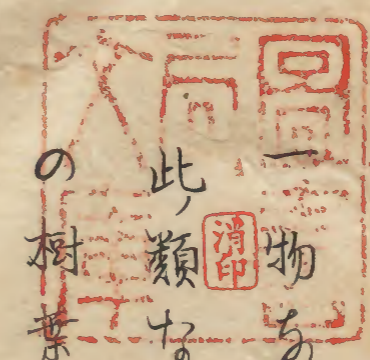
見一即圖の如一紅葉實に

可愛又唐繪紅楓の圖詩あり此圖に等ニ





て葉か
 如く岐くくす
 一物とをぼく待る仙海をい
 脂地小入て千年虎魄と成といつるハ別
 樹のつゆと厚半子西京賦に梗楓と云あり



一物あり
 此類なりん諸木季秋初冬山に里江黄
 の樹葉いしく真あり猶ち也過るはと何
 是なりと怒りハ

